巻 頭 言

節目

中村 渉✉
長崎大学大学院 医歯薬学総合研究科 加齢口腔生理学分野

哺乳類の概日時計として視交叉上核が発見されてから、今年で 50 年を迎える。1972 年 6 月に Stephan と Zucker は、ラットの視交叉上核を実験的に破壊すると輪回し行動と飲水行動の概日リズムが消失することを PNAS 誌に発表した。同年 7 月発刊の Brain Res 誌に Moore と Eichler は、同じく視交叉上核破壊により副腎コルチコステロン含有量の概日リズムが消失することを発表している。これら相補的な論文がほぼ同時期に出版された 1972 年を視交叉上核元年とすることに異論はない。しかし、この節目の年から 30 年後の 2002 年に、パイオニアの一人である Irving Zucker 教授に当時のことについてお話を伺った際、「日本のグループの視交叉上核破壊による睡眠覚醒リズム消失実験（Ibuka と Kawamura, 1975, Brain Res）は、私たちの仕事と同等に扱われるべきである」と述べられていた。日本の時間生物学に対する敬意を払われており、それから 20 年が経過した現在でも深く印象に残っている。

私自身が視交叉上核の存在を知ったのは、概日時計中枢としての発見から 25 年が経過した 1997 年の秋である。当時、北海道大卒業 1 年目の歯科研修医として大学院での研究テーマを探していた私は、本間研一先生の研究室で、ラットの視交叉上核を摘出し組織切片として培養する実験手技の手ほどきを受けていた。その後半年間では研究成果を上げるには至らなかったものの、大学院博士課程でも研究を続けることを許された。当時を思い起こしてみると、いささか受け身の印象をぬぐえないが、日本時間生物学会会誌との出会いこそが人生のターニングポイントとなったといっても過言ではない。新年度よりはれて大学院生として視交叉上核に取り組んでいた矢先、実験指導をいただいていた本間さと先生から、日本時間生物学会会誌 1998 年 4 巻 1 号を手渡された。巻頭言を井上慎一先生が執筆され、視交叉上核発見 25 周年を記念して特集号が企画されていた。井上先生は、1997 年 8 月に Harvard Medical School で開催されたシンポジウム「The 25th anniversary of the ”discovery of the SCN as the circadian clock”」について言及され、御自身の論文（Inouye と Kawamura, 1979, PNAS）が選出された「The Eleven Papers of the SCN」の論文リストを提示されていた。また、“この選定にはいろいろ意見があると思うが”と添えて、“本格的に視交叉上核について仕事をしようと思う方は目を通されたら得るものが多いと思う”と控えめに推薦されている。さらに、特集号では山崎晋先生、秋山正志先生と柴田重信先生、本間さと先生、篠原一之先生がそれぞれの視点から視交叉上核に関する総説を寄稿されており、それらの参考文献リストはまさに初学者にとって格好の道標となった。

本筋とは外れるが、1997 年はそれまで大学図書館などに利用が限定されていた文献データベース MEDLINE が「PubMed」として一般公開された年である。当時は全文記事へのリンクは少なく、件の「The eleven papers of the SCN」も時間生物学会会誌 4 巻 1 号を携えて図書館の書庫に通い詰め、参考文献リストを頼りに目当ての論文を探し当てては読み進めていた。それに対して近年、文献探しのために図書室へ足を運ぶ機会は激減している。大学教員として研究に携わるうえで論文データベースの利便性は不可欠であるが、なにぶん隔世の感は否めない。日本時間生物学会会誌は 1994 年に生物リズム研究会と臨床時間生物学会が統合されて設立された日本時間生物学会の学会誌として 1995 年に第 1 巻が刊行された。 2003 年に会誌の名称を現在の「時間生物学（Journal of Chronobiology）」へと改称している。内容は常に学際性豊かで世相を反映し、会誌が手元に届くたびに記事の分野領域を問わず巻頭言から熟読してしまう。今後は学会誌に育てていただいた 25 年を節目に、編集委員会の一員として魅力あふれる誌面作りを通し学会の発展に貢献していく所存である。

✉ wataru_nakamura@nagasaki-u.ac.jp